

日本で研修を受けたアフガニスタンの

女性教員を訪問して

人間文化研究科助教 勝野 正章

平成十五年九月にアフガニスタンの首都カブールに約二週間滞在し、二月から三月にかけて行われた「アフガニスタンの指導的女子教育者のための研修プログラム」に参加した女性校長と大学・教員養成カレッジの女性教員を訪ねてきました。五女子大学コンソーシアムの座長でもある箕浦康子先生が代表を務めている研究プロジェクト（日本学術振興会からの科学研究費補助金を受けています）の一環として、研修の成果がどのように生かされているのかを実際に研修参加者の学校や大学・カレッジを訪問し、「目で見て、耳で確かめよう」ということが目的でした。



一年生の教室

ることができて、とても励まされたといえます。今回の訪問では、その校長先生たちが劣悪な教育環境（校舎や施設・設備）のなかでも、生き生きと教育の仕事に取り組んでいる様子を見ることができました。校長先生たち

研修プログラ

ムに参加して、校長先生たちは戦後の日本が国家再建の要に教育を位置づけて重視したことを学び、自分たちがいまアフガニスタンでやるうとしていることの意義を確かめ

は、自分の学校に帰るとすぐ、研修で学んだアイデアを他の先生たちに伝え、新しい取り組みを提案して実行に移していました。たとえば、帰国してから学校に保育所（託児所）を設置した校長先生が何人もいました。これは、本学の「いずみ保育所」を見学して女性教員が安心して働けるためには、こうした施設が必要であることを痛感したからだそうです。また、校長先生たちは、研修プログラ



生物の授業

ムで訪問した日本の学校の雰囲気がとても家庭的で親密であるという印象を持つたといえます。そこで、自分たちの学校でも、生徒の作品を展示したりするなどの工夫をして、生徒たちが安心して「居る」ことのできる学校にしようとしていました。戦争と混乱のなかで子どもたちが学校に行きたくても行けなかったアフガニスタンでは、こうした課題はどの学校でも共通するものなのでしょう。

学校を訪問すると、どこでも大歓迎を受けました。それは五女子大学が行っている「アフガニスタンの指導的女子教育者のための研修プログラム」をはじめ、日本の教育復興支援が評価され感謝されているからにほかなりません。授業の様子と学校施設を見せてもらった後、きまってるまわられたチャイ（お茶）とナン（パン）のおいしかったこと。実を言うと、私は冬の研修にほとんど貢献していなかったものですから、心のこもった歓待

に感激するとともに、研修プログラムを実質的に担われた方々に対して申し訳ない気持ちにもなりました。

そして特に感激したのは、いくつかの学校で子どもたちが民族音楽で歓迎してくれたことです。歌の言葉は理解できなくても、心は十分に伝わります。この歌声を私が独り占めにするのではなく、日本に持ち帰ることができたらと思います。とりわけ、校長先生たちが本学を訪問したときに、エイサーを披露してくれた附属高等学校の生徒さんたちに聞かせてあげたい。いまはまだアフガニスタンと日本の間を行き来できる人は限られています



歌で歓迎してくれる子どもたち

が、近い将来、両国の子どもたち、若者たちが自由に交流しあうことのできるようになることを強く願わずにはいられません。今回、私が行った調査のレ



仮校舎の中の教室

ポートは、本学のホームページ（「アフガニスタン女子教育支援」：「インパクト調査報告」）に掲載していますので、ご関心のある方はぜひご覧ください。